

真宗によるアジア開教・教育事業記事の集成

はじめに

本共同研究は、近代における真宗東西両派（真宗大谷派・浄土真宗本願寺派）によるアジア諸地域への開教事業、およびそれに伴った教育事業について、その展開の概要と傾向を把握することを目的としてきた。その目的に至る方法は、宗教新聞と両派機関誌に掲載されてきたアジア開教関係記事を網羅的に蒐集し、その整理を行うという作業を中心据えるものであった。具体的には、宗教新聞である『中外日報』『文化時報』、そして大谷派発行の『配紙』から『宗報』『真宗』に至る機関誌、そして浄土真宗本願寺派発行の機関誌『教海一瀾』、などからの関係記事の抜き出しと記事目録の作成である。

本報告では、当初予測をはるかに越える膨大な記事量に取り組んできた中から、研究員のそれぞれが担当した作業の一端を示して、いかに広がりのある追求課題であり、そして重要課題であるか。しかも基礎作業が不可欠のものであるかを知つて戴こうと思う。

報告1は、総論的視点をもつて榎木研究員が宗教新聞『中外日報』記事からの分析を試み、あわせて作成した記事目録の一部である大正前期三年の分を、目録化作業の例として掲げる。その全体作業量をも類推して戴ければ幸いである。報告2は、本願寺派中国上海開教記事に絞って、蒐集記事からの抽出による傾向分析を小島研究員が行っている。上海における開教活動の類型が知られるところであり、これにも記事目録一覧の一端を付して作業経過が分るようにしている。

報告3は、大谷派アジア開教史の展開における一つの大きな節目に着目したもので、木場研究員が担当し関係記事目録を付す。

いずれにしても、報告としてはなお未完の域ではあるが、こうした関係記事蒐集、記事目録化、整理、分析、という

作業の息の長い継続のうちからこそ、視野の広いアジア開教の位置付けがなし得るものと確信している。ちなみに、浄土宗の『浄土宗海外開教のあゆみ』（平成二年刊）を編集する過程において、浄土宗発行の機関誌について同様の作業がなされたことがあつたが、作業期間八年を要したということである。資料集成作業からの中間報告として以下を御覧願いたく思う。